

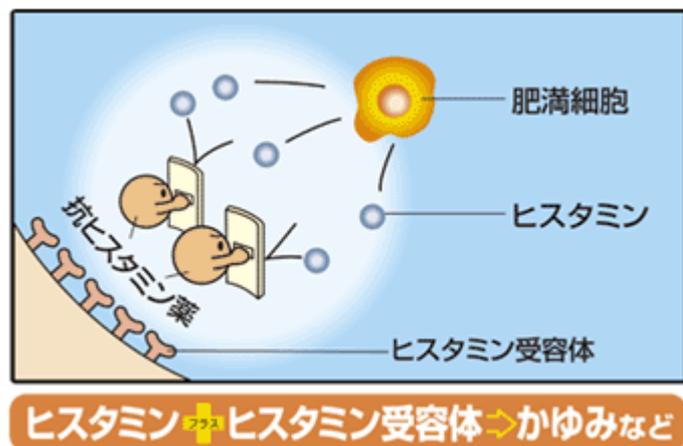
薬剤部 DI ニュース

花粉症の薬、第二世代抗ヒスタミン薬の強さ・眠気比較

現在、花粉症の薬の主角となっている第二世代抗ヒスタミン薬について、比較をまとめました。この薬は、現在根本治療方法が存在しない花粉症の対症療法の薬としてメインの役割を担っています。

【抗ヒスタミン薬とは】

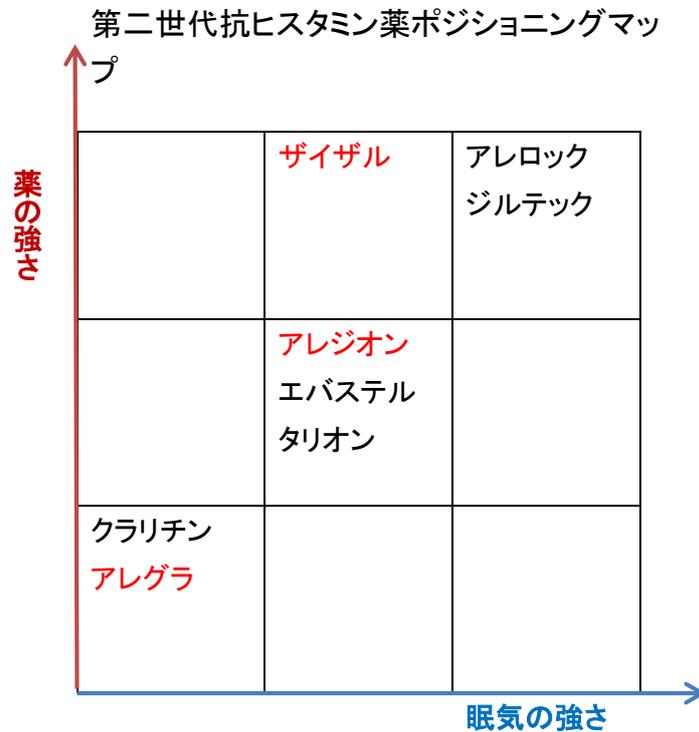
一言でいうと、かゆみや鼻水の原因となるヒスタミンをブロックする薬があります。花粉などの刺激を受けると、肥満細胞という肥満とは何の関係もないが丸々膨らんだ形からそう名付けられた細胞からヒスタミンという物質が出ます。それがヒスタミン H1 受容体に結びつくことでくしゃみや鼻水が止まらなくなってしまうというのが花粉症の仕組みです。



このヒスタミン H1 受容体と先に結びついて、ヒスタミンが結びつく余地をなくしてしまおうというのが抗ヒスタミン薬の役割であります。ちなみにこのヒスタミンという物質、脳内の伝達物質としても使われています。そしてポララミンなどの初期の抗ヒスタミン薬(第一世代抗ヒスタミン薬)は、脳にも薬が届いてしまうことで、脳内の伝達物質としてのヒスタミンの活動も阻害してしまうことで眠くなってしまふという欠点がありました。花粉症の薬が眠くなると言われているのはそのためです。こうした副作用を改善し、薬が脳に届く副作用を改善したものが第二世代抗ヒスタミン薬と呼ばれているものであります。これらの薬は基本的に医療用の処方薬として用いられてきましたが、最近では処方薬から市販薬に転用されたスイッチ OTC 薬も増えてきています。眠気の少ない花粉症の市販薬を探す場合は、この第二世代抗ヒスタミン薬の中から選ぶのがよいです。

【第二世代抗ヒスタミン薬の比較】

第二世代抗ヒスタミン薬「商品名(一般名)」: アレジオン(エピナスチン)、クラリチン(ロラタジン)、アレグラ(フェキソフェナジン)、ジルテック(セチリジン)、アレロック(オロパタジン)、エバステル(エバスチン)、タリオン(ベシル酸ベポタスチン)、ザイザル(レボセチリジン)の8種類あります。
(赤字は院内採用あり)



注: アレジオンおよびアレグラは後発医薬品が採用されています

第二世代抗ヒスタミン薬の強さと眠気の比較が一目でわかるようにポジショニングマップを作りました。これは私の意見というよりも、第二世代抗ヒスタミン薬の効果を比較した論文や、ネット上で確認できる医師、薬剤師など医療関係者の意見を総合したものになっています。

第二世代抗ヒスタミン薬の比較の軸は大きく2つあります。薬の効果の強さと眠気の強さです。基本的に効果が強いほど眠気の副作用も強くなるという関係になっていますが、この中で一番新しい**ザイザル**という薬に関しては、**ジルテックから眠気成分だけを取り除いたものになるため、薬の強さを維持しつつ眠気が少ないもの**になっている。

なお、第二世代抗ヒスタミン薬の中で、薬の添付文書の「重要な基本的注意」の項目に眠気を催す旨の記載がないのはアレグラ(**フェキソフェナジン**)とクラリチンの2つだけあります。この2つに関しては、プラセボ(ニセの薬)との比較実験を行い、副作用として眠気が確認されないことが実証されているため、**パイロットや運転手など、交通業務従事者の第一選択薬**になっています。

尚、2013年に発売されたディレグラという薬に関しても少々言及しておく、この薬は、アレグラにプソイドエフェドリンという鼻づまりを緩和する血管収縮薬成分を付加した薬になるので、抗ヒスタミン薬としての薬の強さは、アレグラと同じところと考えてもよいでしょう。

(薬剤部 吉村)